

Keynes 理論の再考察

森 井 昭 顕

1. はしがき

John Maynard Keynes (1883~1946年) は英国国教会の人 (a man of establishments) ではなかったが、彼がメンバーであった英国国教会のエリートであった。彼はイングランドのベスト スクール イートン (Eton) に進んだ。そこでは知性あるエリートの一人であるカレッジと社会的エリートのポップ (Pop) のメンバーであった。彼はケンブリッジ (Cambridge) のトップ カレッジの一つキング (King) の卒業生でありフェロー (fellow) であった。また選ばれた知識人グループ アポストルス (Apostles) のメンバーであった。彼は大蔵省の最高の国内省 (top home department) の文官 (Civil Service) になった。また彼は一人の首相の親友であり多くの相談役でもあった。彼はアルフレッド マーシャル (Alfred Marshall)⁽¹⁾ のお気に入りの弟子であり、イングランドの経営学首脳部 (economic establishment) の核心をなしていた。国民相互生命保険界 (the National Mutual Life Assurance Society) としてイングランドの金融寡頭政治 (financial oligarchy) の中心にいた。また彼は人文科学社会 (world of arts) においてイングランドの最も勢力のある文化仲間ブルームズバリー (Bloomsbury) のメンバーであった。教育界との関係 (communication) は常に非の打ちどころのない権威者の地位にあった。この地位は、彼のまぶしい英知および実務的知性によって大きく成就していったのであるが、J.M.ケインズのトップへの道は平坦ではなく、多くの苦勞によって磨がか

けられていったのも事実である。

彼の歩んだ道程には、彼の両親ジョン ネビル ケインズ(John Neville Keynes)⁽²⁾ およびフローレンス アダ ケインズ (Florence Ada Keynes)⁽³⁾ の非常なる熱意があったことも見逃がされない。私の経済学の勉強に常にケインズの経済学があった。私が大学に入り、3年生の授業で初めてケインズの経済学に出会い、難しいものだと感じた反面、おもしろ味をも感じたのが私の出発である。大学院受験において彼の一般理論 (The General Theory) を目にし、文章の難解さにも直面した。それ以来ある程度の数学を勉強する機会にも恵まれ、ケインズの経済学のとりこになったと言っても過言ではない。本稿を書くに当りケインズの伝記 (biography) を読む機会にもなり、種々なる彼の一面に触れ、もう一度ケインズ理論を考察する機縁にもなったのである。このような機会が与えられたことに感謝するとともに、研究者としての喜びを感じつつ、私の両親に謝意の念を表する次第である。なお本文中における誤謬すべては不勉強によるものであり、私自身の責任であることを附記しておく。

2. ケインズを育くんだ環境⁽⁴⁾

J.M.ケインズの祖々父キャプテン アレクサンダー ケインズ (Captain Alexander Keynes) は英国国教徒 (Anglican) として出発したが、まもなく浸礼教徒 (Baptist) になった。しかし彼らは装飾用左官 (ornamental plasterer) と刷毛製作者 (brushmaker) としてサリスバリー (Salisbury) に移った。J.M.ケインズの祖父ジョン ケインズ (John Keynes) は1805年の生まれでケインズ家の財産を貯えた。サリスバリーのウイットシェアー (Wiltshire) から来た実業家であった。ジョン ケインズは事業に機敏であり地方の名声を得ていた。彼自身非常に信用があったし、事業における彼の商業活動は驚くべきものがあつたようである。彼が成功したのは銀行および他の商業活動と多角化したことであつた。彼は懸命に働き人生の成功および宗教的原理をものにした。また彼は多くの地方学校を支援し、バプ

テイスト ブラウン街 (Baptist Brown Street) の日曜学校の校長にもなった。

ジョン ケインズの最初の妻マティルダ ブラック (Matilda Blake) は娘ファニー (Fanny) を産んだが、コレラで亡くなった。1851年彼はエセックス (Essex) の農業を営む家族のアンナ メイナード (Anna Maynard) と結婚し、J.M.ケインズの父ジョン ネエビル ケインズ (John Neville Keynes) は一人息子として1852年8月に産まれた。ネビルの父の種苗商と隣接したサリイスバリイ (Salisbury) のキャッスル街 (Castle Street) の居心地のいい家で成長した。彼の父ジョン ケインズは宗教的な人であり精神的戒律としての宗教を信じていたが、1878年2月に胃癌で帰らぬ人になった。彼の残した遺産は実質で合計£40,000以上の資産を残していた。そのうちのネビルの分け前は£17,000であり、彼の姉ファニーは£12,000、ケインズの未亡人アンナは信託財産£13,000 プラス サリイスバリイの家を得た。

ネビルは7歳の時リーディング (Reading) 近くのカバーシャム (Cavarsham) の100人ばかりの小さく閉鎖的な非国教派アカデミー (Academy) のアマーシャム ホール (Amersham Hall) で教育を受けた。アマーシャム ホールは外科、薬科、法律、文学においてリードする上級の一級合格者を産出していた。彼は1869年4月に大学入学資格試験において神経過敏になり失敗しただろうと思っていたが、その夏大学入学資格試験に合格し、ロンドン ユニバーシティ カレッジ (London University College) のギルクリスト (Gilchrist) 奨学金を得ることができた。同年10月に彼の17歳の誕生日後にブルームスバリイのゴードン スクエアー (Gordon Square) のユニバーシティ ホール (University Hall) に住居を移した。これは非国教徒学生のための監督付き宿舎であった。ヘンリー フォーセット (Henry Fawcett) は2年間ロンドンに行くことを勧め、またケンブリッジ (Cambridge) をも勧めた。彼の父ウイリアム フォーセット (Williams Fawcett) とネビルの父ジョン ケインズはサリイスバリイの

古い友人であり、ネビルが最も影響を受けたのはヘンリー フォーセットである。1870年にネビルは文学士 (Bachelor of Arts=B.A.) の第一部の最初のクラスを得た。また彼は1872年6月にペンブローク カレッジ (Pembroke College) のトリニティ ホール (Trinity Hall) 試験にパスし、数学の奨学金£60を獲得した。1871年10月には第二部の論理的道徳的哲学の学位 (Logic and Moral Philosophy Honours) を得ている。ケンブリッジの道徳的科学は伝統の産物であり、ケンブリッジ経済学はケンブリッジの道徳哲学と並んで発展した。

ネビルは1876年6月にロンドンの政治経済の文学修士 (Master of Arts=M.A.) を取り、ペンブロークのフェロー (fellow) に選ばれた。彼はギルトン (Girton) およびニューンハム カレッジ (Newnham College) を含む多くのカレッジで論理学の講義を命じられた。フェロー制度は大学再編の動きへと発展していき、ケンブリッジにおける女性の出現は広く手を伸ばし、増大する背信行為の力になった。このことはビクトリア朝からの逸脱であった。高い女性教育の副産物の一つがアカデミック マリッジ (academic marriage) であった。アルフレッド マーシャン (Alfred Marshall) はその傾向を設定し、ネビルは彼の跡を受け継いだ。

1878年10月に17歳のフローレンス アダ ブラウンがニューンハム ホールにやってきた。当時のニューンハムは約30人の学生のみのレジデンス ホール (Residence Hall) であり、学長は Miss クラウ (Miss Clough) で非常に個性の持主であったらしい。17歳のフローレンスは Miss クラウの保護のなかで最も若かったが、彼女は付き添いを条件に時折抜け出し、ブルークサイド (Brookside) のボンド (Bond) におけるパーティに出かけた。ネビルとフローレンスの最初の出合いはブルークサイドであった。一年後の1880年5月20日に彼はプロポーズし、彼女はそれを受け入れたのである。

フローレンスは1861年3月にマンチェスター (Manchester) で生まれ、3年後ブラウン家族は⁽⁶⁾ベッドフォード (Bedford) に移った。彼女の祖父

デビッド エドバラード フォード (David Edverard Ford) はマンチエスターで酒類密造者であり、祖母ジューン エリザベス フォード (June Elizabeth Ford) は非常に批判的な女教師であった。フローレンスの父ジョン ブラウンは親しみやすい学者で思慮ある行為の人であったらしい。彼女の母アダ ブラウンは娘の教育のために牧師館に学校を設立し、彼女は母によって十分に家庭で教えられた。このことはフローレンスにとって幸運であり、祖母および母は非常なる教育主義者であった。祖母ジューン エリザベスは18人の子供をもち、彼らを育て、祖父の大きな家で成功する学校になるように管理した。

ケンブリッジは1869年に18歳以上の女性に地方の高等試験を開始した。1871年10月にリージェント街 (Regent Street) 74に5人の学生による監督付き宿舎として開校し、1875年10月にニューナム ホールは現在地に開校した。フローレンスは17才の時までバンヤン ミーティング 日曜学校 (Bunyan Meeting Sunday School) を維持するために母を助けていた。ネビルと結婚するまでの2年間そこで生活を続けた。彼らの結婚は1882年8月15日であり、セロモニーはベッドフォードのバンヤン ミーティングで催された。ネビルとフローレンスは同年11月にハーベイ ロード (Harvey Road) No.6に居をかまえた。1883年6月5日の3:15a.m.までフローレンスは快地よく眠ったが、陣痛が始まり、そこで Mrs. ブラウンを呼び、7:15 a.m. に医者ウエリイ (Wherry) を呼びに行った。9:00a.m.ごろまでネビルは彼女を見ていたが、その後は部屋に入れなかった。9:45a.m. Mrs. ブラウンは戸外にやって来て、男の子が産まれたことが告げられた。ジョン メイナード ケインズ (John Maynard Keynes) と命名された。フローレンスの父ジョン ブラウンは「ジョン メイナード ケインズの名前は賢明な小説の重厚な英雄のように聞こえる」と書いている。

メイナードは特殊な歴史の瞬間におけるある文明のなかで産まれた。そして偉大な人物ヘンリー シジウツク (Herry Sidgewick)⁽⁷⁾ およびアルフレッド マーシャル、同僚の影のもとで成長した。彼の思考スタイルおよび人

生の方法はケンブリッジの明白な痕跡にある。ビクトリア朝のケンブリッジの知的生命は宗教的信頼の危機および最終的減少によって形づくられていた。つまり1860年代はケンブリッジの人々が宗教的教義を失った10年でもあった。1867年の第二回改革法の結果とともに閉鎖され、マス デモクラシイ (mass democracy) の誕生は人々の心を社会秩序および個人行動の問題に集中させた。ビクトリア的秩序は複音主義宗教および社会的差異を残したが、暗礁にのりあげ、啓蒙のイングランドおよびスコットランド (Scottish) の思考者は個人的興味および選択の主権にもとづいた政治的・道徳的・経済的哲学を選んでいった。

両親は赤坊のメイナードに酔わされていた。彼は舌たらずで生まれた。フローレンスは彼が9カ月で離乳するまで正常に授乳しつづけてきた。彼は成人としてもわずかに舌たらずな発音をしていた。フローレンスは苦しいほどにベイビー (baby) の彼を愛していたし、ネビルもまた彼の笑みと小さな腕が最も大きな喜びであることに気づいていた。メイナードはやせた神経質でひよる長い子供であり丈夫ではなかった。彼の最初の3年はしばしば病気と下痢、発熱に苦しみながら成長した。彼はしばしば学校を引き上げ、あるいは学校の仕事は放免されていた。14才までにはすでに彼の父よりも背が高かった。

メイナードは5歳半の時女性のためのパーズ スクール (Perse School for Girls) の幼稚園に通い始めた。6歳頃からは著しく怒りぽかった。1889年末頃に彼は算数における才能を示し始めた。悩まされた彼の父は「メイナードの神経が非常に神経質になっていると思われる」と同年10月に report している。彼は絶え間なく目ばたきをし、そして時々青白い外観でいかめしい方法で現われることがあった。彼の痙攣はウエリイがサイデンハム (Sydenham) のコレラと診断した後10月30日まで非常にものすごかった。その夏にはセント ビータス ダンス (St Vitus dance) おそらくルーマチ熱の発作の余波があった。1890年12月にメイナードは算数の力を示し、ある理由でこれを最後に幼稚園を離れ、一年間家庭で過した。1892

年1月にメイナードはトランピングトン ロード (Trumpington Road) にあるセント フェイス プレパレイトリイ学校 (St Faith's Preparatory School) に男子通学生として出発した。この学校は学識要素を認識していたラフなビクトリア的教師ラルフ ゴードチャイルド (Ralph Gordchild) によって創立され経営されていた。

メイナードは10歳前には代数の二次方程式および数学の根幹であるユークリッド (Euclid) の Book I, ラテン語のオビテイウス (Ovid) および散文, 英語のサムソン エゴニイスト (Samson Agonists) を読み終えていた。

1893年秋に両親は彼の健康を心配し、フローレンスの祖母ブラウンが教室を再開したベッドフォードにメイナードを移した。彼は楽しい文通者であった。同年10月1日に「私はニヒリスト (Nihilist) と非難され、Through the Fray と呼ばれたヘンティ (Henty) の2冊を最近読み終え、今日は成功の冠り (Crown of Success) を通読している。同月8日キンドナップド (Kidnapped) の続編およびリフュージー (Refugees) を手に入れた。私は新アラビアンナイト (New Arabian Nights) の第2センス (second scene) を読んでいる」と書いている。

1894年6月彼はネビルによって試験技術をコーチされた後に、初めてクラス勉強 (classwork) のトップになった。セント フェイスにとどまっている間は、揺さぶられなかった彼の優勢はしっかりと数学に基礎があった。同年10月から彼にとって週4日2時間の過剰コーチが始まった。同年11月ネビルはメイナードが公式 $(x+y)^2 = x^2 + 2xy + y^2$ を適用することによって、多くの2数字を2乗する方法を見出したとノートしている。すなわち数学者として重要な力である代数学の才能の最初のサインであった。すでに年齢に比して背が高く、ベッドフォードから帰って後にも身長はすくすく伸び始めた。メイナードは学校の他の全少年の頭および肩以上の高さがあった。

3. ケインズのイートンでの生活⁽⁸⁾

1896年末にメイナードのどもの増加についての心配にかかわらず、両親は次の年の6月にイートン カレッジの給費試験 (Eton College Scholarship Examination) に参加させることを決めた。それは彼にとってイートンで花開いた頭脳であった。両親にとって貴族的な裕福なイートン校の校外宿生にすることは決して夢ではなかった。イートンは各年に約15人の少年が競争試験の結果で選ばれるイートン カレッジを意味していた。このことはイングランドの将来有望な知的なエリートの断面図を図るメイナードの最初の機会であった。

同年6月6日火曜日のラテン語作文のためにアパー スクール (Upper School) にメイナードを送り出した。ラテン語訳 (Latin Translation) と数学が続いた。翌朝メイナードはベレンテインの ビーフ エクトラクト (Valentine's Beef Extract) のギリシヤ文法を手早く処理したが難しい数学は続いた。その日がひどく長く思えると不平を言いながら、午後のギリシヤ語訳をした。木曜日の朝はラテン語の詩でその試験はうまく適しなかった一般論文を終えた。ニュースが月曜日にやって来なかったので、彼とフローレンスは希望を捨てかけていたが、5:30p.m.に電話があり、メイナードが第10回カレッジ給費生 (10th College Scholar) であることが告げられた。

1897年9月にメイナードは第10回キングの給費生 (Tenth King's Schools) としてカレッジの地位を与えられた。彼はイートンへ行く時が近づくにつれて憂うつで怒ぼくなった。彼の父は彼の健康と礼儀作法について心配していた。結局彼は4日遅れて9月26日に母とともにケンブリッジを離れた。彼はイートンで著しく成功し、そこで圧倒的に幸せであった。カレッジで彼の知能は気の合った仲間たちおよび勉強するに好ましい環境のなかで成長していった。彼の精神発達は家庭においてまたイートンにおいて、後のケンブリッジ キングス カレッジ (Cambridge king's College)

において周囲の状態によって支えられた。

数学は初めからメイナードの長所であり古典もまたよかったし詩歌の構成は模範的であった。メイナードは勉強するのにスピードがあり、それは記憶および本質的な点の理解に基づいていた。English language の熟達⁹が認められていたことは古典の翻訳およびエッセイ サイド (essay side) すべてに特に有力であったが、ラテン語の散文は不思議なくらいしくじりをさらしていた。

メイナードはイートンにおいて驚くべき受賞者だった。第一年で10ヶ、第2年で18ヶ、第3年で11ヶなど、総計で63ヶを得た。彼はすべて数学賞を得たが途中で化学賞を得ている。彼は賞獲得の喜びのためではなく、勉強の喜びのための勉強であった。彼は第4年に何の賞をも得ていないのは運動および学校の諸事情に興味をもっていることがかなり詳細に伝記のなかで書かれている。メイナード18歳の誕生日に数学のトムライン (Tomline) 試験が始まった。「代数学と円錐曲線論の分析は途方なく易すかったが、種々なる計算および方程式論は通常よりも難しかった」と父ネビルに語っている。

メイナードのイートンでの生活はそれが始まったと同じように精力的に終わった。シェクスピア社会 (Shakespeare Society) の別のメンバーは、第4回6月スピーチ (Fourth of June Speeches) について大騒ぎの部分⁹を演じた。メイナードもまたシェリダン (Sheridan) のIII The Rival の段でハロルド バター (Harold Butter) のサー ルシアス (Sir Lucius) の相手役としてアクレス (Acres) を演じた。7月の初め彼はひどい熱におかされた。スイスインバンク (Swithinbank) は最も献身的に彼を看病した。7月の終りに彼はケンブリッジの高等卒業証明書を取り返した。準備不足にもかかわらずトップになった。その時彼は19歳であった。ケンブリッジにおいて彼の価値を変えたのは哲学、美術および感情的な目覚めであった。彼は決して公共義務を引き継いだ感覚を失ってはいなかった。イートンでの教育はますます増大していた。彼が文化的な生活のリードおよび個人的な

幸福の要請に対するバランスは、ケンブリッジ社会の感動的および哲学的環境から生じていた。この価値の転換として1441年にキング ヘンリイ六世 (King Henry VI) によって創立された。

メイナードが着いた時キングスは波の頂上であった。1875～84年の10年は意外なほど差別の時代であったが、その全名前にカレッジは楽しんでいった。給費生の取り入れ、その大学生すべてが学士優等試験をとることを主張し、キングスはアカデミック エリート (academic elite) を教育しようとしていた。またトリニティ カレッジ (Trinity College) およびセント ジョンズ (St John's) は学研的な社会的名声のライバル (rival) であった。たとえ給費生と仲間との間で通常の配分があったとしても、イートンの学生はここで知的な価値が尊重され、親密さの伝統はイートンから受け継ぎ、研究員と学生 (student) の間にも密接な契約があった。19世紀後期のキングのフェロー (King's Fellow) は給費生よりもむしろ特徴的な教師が顕著であった。キングスの男性はその場所の特別な環境および彼らの生活すべてに彼らとともに教師に影響をもたらした。

キングスはイートンとともに実務的な英知の発揮によって大事にされ、価値をうるように熱烈な忠誠を目的にしていた。メイナードが最初に持った知的興味は経済学よりもむしろ哲学にあったことは驚きではない。メイナード時代における社会の二次的重要な興味は美術であった。哲学的および美術的な流れはメイナード時代における社会心理の探究の流れであった。

1903年7月12日にメイナードは教会に面したステアケース (Staircase) A のウイルキンビル (Wilkins building) の新しい部屋に移った。同年11月24日に彼は自由貿易 (Free Trade) を支持する団体についてスピーチした。1903年に保護および帝国選好のためにジョセフ チェンバライン (Joseph Chambulain)⁽¹⁰⁾ の呼びかけによって起った自由貿易、保護の議論は政治的活動と同様に経済的行動にメイナードを動かした。ほとんどのケンブリッジの経済学者のようにメイナードは堅固な自由貿易者であった。メイナードは失業が輸入増加から生じるのでないと大胆に宣言し、1903年8月15日の

ザ タイムス (The Times) に発表、自由貿易論 (Free Trad Manifesto) の先頭に立っていた。実際に自由貿易は第一次世界大戦以前に単なる政治的要因であった。保守主義は死に、そして再び生まれた。彼はスイスインバンクに12月15日付き手紙に次のように書いている。「私は牧師、および保護主義者は嫌いだ。自由貿易および自由思想だ!! 司教および関税を打倒せよ!! われわれが厄介払いし非難していると宣言する人を打倒せよ!! 救済あるいは報復の計画すべてを追い払え!!」と。

1904年6月5日に彼は21歳であった。メイナードは自由クラブ (Liberal Club) およびケンブリッジ団体 (Cambridge Union) の両会長になっていたし、オックスフォードおよびエジンバラの討論に加わっていた。

1905年3月30日に試験が始まったが、彼は第12回1級合格者 (twelfth wrangler) にどうにか判定され、彼がトップの1級合格者にならないということはかねてから予見されていた。同年6月30日彼はマーシャルの経済学原理 (Principles of Economics) の勉強を始めた。哲学はケインズの人生の基礎を与えた。それは経済学以前であり、ケインズ哲学は1903~06年の間に完成され、主としてアポストル (Apostles) のサークルのなかで敷衍していた。同年6月8日にメイナードは3週間キングスの住民に帰った。ここで彼は経済学および道徳的哲学に没頭し、⁽¹¹⁾ 楽しくもないが痛みのない存在で送った。彼はジェボンズ (Jevons) が世紀の一つの精神であると考えていた。

彼はマーシャルの経済学に刺激を受けた。彼のノートおよび4つのエッセイのボルダー、つまり純粋経済学 (Pure Economics)、資本 (Capital)、租税 (Taxation)、トラストおよび鉄道 (Trusts and Railways) に残っている。彼は個人的にプリントされたマーシャルの2つの論文、純粋外国貿易理論 (The Pure Theory of Foreign Trade)、純粋国内価値論 (The Pure Theory of Domestic Values) をジェボンズ、クールノー、エジワースと同じように勉強した。ジェボンズは彼に刺激を与え続けた。彼はジェボンズの政治経済論 (Theory of Political Economy) から純粋経済学 (Pure

Economics) における価値の発端を要約している。ジェボンズは価値は単に最終的効用度 (final degree of utility) に依存するという彼の信条を述べている。すなわち生産費は供給を決定する。供給は最終的効用度を決定する。最終的効用度は価値を決定する。労働者の価値はそのように本質的な価値がある。その価値は生産物の価値によって決定されねばならないが、労働の価値によって生産物の価値を決定するのではない。マーシャルはメイナードの勉強ぶりに感動させられた。そして彼の非常にずさんな書き方のエッセイすべてにわたって赤インクで意見をなぐり書きした。

4. インド経済への関わり⁽¹²⁾

1905年12月彼は帰宅して両親に経済学の学士優等試験 (Economics Tripos) を放棄し、文官試験 (Civil Service Examination) に専念することを知らせた。マーシャルは彼の決定を遺憾に思った。メイナードとネビルはさし迫った文官試験のための準備に入った。彼は再び数学を勉強しており、むしろ憂うつな状態に陥っているように思われた。1日14時間勉強し、ホーラス ウェルポール (Horace Walpole) を読み、論理学と数学を週50時間勉強した。そして心理学はさっさと済ませ、形而上学および論理学を始め、政治科学、歴史、経済学を続けた。1906年8月2～24日までの期間、試験のために全力を注いだ。彼は104人の志願者から2番だった。彼は最高6000点から3498点を得た。3917点はオックスフォード バリイオルカレッジ (Oxford Balliol College) からの古典学給費生のオット ニーメイヤー (Otto Niemeyer) だった。ニーメイヤーは大蔵省を選び、メイナードはインド省 (India Office) に入った。1906年10月6日メイナードはインド省の陸軍省の下級事務員として文官履歴が始まった。彼の給料は年£200であった。その主な機能はインドへまたインドからの積極的な論文であり毎年幾百千通であった。省および局の多方面にわたるネットワークは英国政府 (Whitehall) の半分のうちの3フロアーを占め、きまった仕事を無理やりにさせられた。

メイナードがインド省を選んだのはインドに興味があったからではなかった。彼は貪欲な金貸しに対する貧乏人を保護し、司法および物質的發展をもたらし、その国に健全な金融制度を与える体制を考えていた。彼は常に英国政府からその統治を見ていた。彼は帝国規則の人間のおよび道徳的な意味を考慮していたのでもなく、ブリティッシュがインドを利用するかどうかではなかった。彼がかつて逢ったインド人はケンブリッジあるいはロンドンであり、彼がかつてインドに関して読んだ唯一の本は金融に関する特殊化された一巻であった。

1907年3月初めに彼は歳入、統計および商務省に移った。それはわずかにきまった仕事であり、商業、土地収益、疾病、飢餓、阿片取引などの問題すべてを取り扱った。彼自身インドの道徳的物質的進歩に関する年報を出版する仕事を始めた。外務省はドイツとの商業交渉、パーシアンガルフ (Persian Gulf) におけるロシアの苦情、中央インドにおける阿片取締り、中国の阿片計画であった。インド省におけるいくつかの爆発があったが、早い時期彼は彼の計算の正確さを問題にした陸軍省上官との衝突であった。

メイナードは彼の仕事に退屈し始め、その夏にインド省を去ることを決意した。インド省からの急速な解放における彼の希望はキングスにおける大学特別研究員奨学金賞 (fellowship prize) 時間を得るのに注がれた。彼はほとんど可能性 (Probability) に関する勉強をしていた。大学特別研究員奨学金賞は単に6年間有効であり、それは職業的展望の提供ではなく、彼のインドのポストを同時に維持することであった。メイナードは研究員の選択者の一人ピグー (Pigou)⁽¹³⁾ に、「私がおもキングスの大学特別研究員に選ばれたならば大学に帰る」と語っているが、4人の候補者のうちの1人にも選ばれなかった。

ケインズの学位論文は本質的に1904年1月のアポストルの論文における考えの展開である。彼はあいまいな議論およびそれにもかかわらず合理的で客観的であるであろう不確定な結論に、新しい論理学を創作するための

適応であった。その学位論文についての最も著しい一つの事柄はケインズの要請の大胆さであった。彼の議論において絶対的なものは、蓋然性が論理学の一般理論としてはっきり考えられるという意見であった。その演繹的な論理は特殊なケースであり確実性のケースに対してのみ適応された。彼が雇用理論 (Theory of Employment) を出版した1936年に議論すべきであった古典派理論は特殊なケースであった。次々に彼の経済理論が適用される蓋然性理論の支流として最もよく考慮されているかどうかは、避けられない不確実性の条件のもとでの合理的経済行動を取扱っている。それがケインズの経済学の状態および意図に関する議論の一つになっている。

1908年のキングスの研究員に選定されることへの失敗は、メイナードがかつて蒙った最悪の学術的な一吹きであった。同年6月経済学の2つの講師取極めのうちの一つはメイナードに提供された。メイナードは彼の24歳の誕生日にインド省を辞任した。彼は省の仕事に関する統計面に確かに興味があった。彼は金融庁の長ライオネル アブラハム (Lionel Abrahams) からインド通貨調整について学んだ。彼のインドに関する専門知識は彼の研究および経済学の授業に補促されたのであるが、文官との接触はインド通貨体系に関する著作およびインド通貨および金融調査委員会のメンバーに対して、全く理論的にリードをなしていた。次々に英国政府および主要な政治的接触によって一層の名声をもたらした。金融経済学者としてではなく、行政理論に適用することのできる人として、1914年の自国危機を援助するために、1915年大蔵省に召喚された。

5. 経済学者としての出発⁽¹⁴⁾

1909年3月メイナードは彼がキングスの大学特別研究員奨学金賞 (fellowship prize) に選ばれたことを聞いた。そして彼は経済学科目の大学学位をとることなしに経済学を教えはじめた。彼の正式な鍛錬はマーシャルの監督のもとで大学院の1学期の研究に限られていた。インド省における彼の余分の時間は可能性 (Probability) に占められていた。彼が経済

学の講師職を得たのは、彼の人生の仕事として経済学を見ないのではなく、ケンブリッジに帰ることを望んでいたからである。

マーシャル以上のほとんどのブリティッシュ経済学者は単一本ジョン スチュアート ミルの原理 (John Stuart Mill's Principles) で養育された人々であった。また彼らの後継者も単一本の人々である傾向があった。マーシャルの原理はメイナードが1905年の夏にそれを徹底的に読み、わかりやすく注解したのは1895年の彼自身のコピー版であった。ケインズは家計における多くの経済学を吸収した。加えてインド通貨および銀行組織の良き研究知識をもって英国政府を退任した。彼は1910年にアダム スミス (Adam Smith) を読み始めた。彼の理論的把握力はそれに関する読書からということよりも、むしろ彼自身に対する問題を解くこと、またそれらを議論することであった。この方法で彼は限られた理論範囲の企業理解を明らかに習得した。メイナードは経済学に着手しながら専門的能力を誇示するために、ほとんどの経済学者と同様に熱心であった。経済ジャーナリストとしての彼のキャリアは直接にケンブリッジへの復帰で始まった。彼はそのスタイル、頭脳明晰、なかならずくそれをするための明敏さをもっていた。その問題にケインズの専門的な深いかかりあいの目標は、1911年10月にエコノミックジャーナル (Economic Journal) の編集者としての地位であった。原稿を読むことは彼の経済学教育の主要な部門であった。彼が考えていたように、その仕事に対して若輩の28歳で管理編集委員職が与えられた。彼の最初の編集活動は経済史のアークデーコン カニングハム (Archdeacon Cuningham) からの投稿を断わることであった。誰もがケインズはすばらしい編集者であるということ認め、懇請した寄稿に想像力が富み、彼らへの関係を奨励しコメントを助けた。ケインズは彼のパンフレット *Les Migradioux de éOren* 1910年で非常に印象づけられた。それは彼がフランス銀行業務 (French banking) に関する寄稿を委任され、3年で達成し、後に多くの励みになる手紙が届いた。ケインズの編集成就の基本は彼が研究を通じて得たスピードであった。経済学に専門的な深いかかりあいは、

彼がより抜きの政治経済クラブ (Political Economy Club) のメンバーに選ばれた1912年からであった。彼は水曜日の夕刻のミーティングのために定期的にロンドンまで行き、木曜日にアデルフィ テラス (Adelphi Terrace) においてエコノミックジャーナル (Economic Journal) の仕事を手早く処理した。

彼の教育に関する拡大にもかかわらず、ケインズの範囲はマーシャルあるいはピグーよりも狭くなった。彼の主たる経済学への興味は可能性 (Probability) に関する彼の研究からの抜粋であった。戦前に彼は主に純粋貨幣論および応用貨幣論に関して講義していた。彼は1906年にマーシャルの講義に出席し、非常にみごとなある図形の例示を思い出していた。1914年以前、彼はマーシャルが残したものから貨幣論を展開するまで何もなかったが、不確定条件のもとでの合理的行動理論を例示しながら金融市場行動に魅惑されていた。

彼は1910年に次のように書いている。「投資家は明らかなように実際に長期投資から受け取る純所得ではなく、期待によって影響されている。それらは流行、広告、楽天主義あるいは不景気の純粹に不合理な波に依存していると同様に、リスクによる期待が関係している。投資クラスの実際の平均によって測定されるような現実リスクを意味しているのではなく、賢くあるいは愚かに投資家によって評価されているようなりスクである。純利子率ができる限り高いという願望は、リスク率ができる限り低いという通常相入れない願望によって修正されている。しかし数学的ルールは損失の懸念と高い利子率に対する願望との間に、ある正確な妥協案の関係を断念することはできない。われわれが考慮しなければならないリスクは主観的なリスクであるから、その大きさは容易に彼に受け入れられる投資に関する相対的情報量に依存している。無学な投資家のために危険な投資が何であるかは、十分に情報をもった専門家に対して例外的に安全であるかもしれない。投資家に対するリスク量は実践的に環境に関する無学程度および彼らが考えている投資予測に事実依存している。」

1910年と同じようにケインズは投資決定において期待、無学、不確実性によって演じられる部分を指摘していた。彼は一般理論(General Theory)において貨幣がなかならず現在を未来に結び付けるための難解な道具であると書いている。可能性(Probability)から生じる彼の主な知的興味は経済行動における因果関係の問題であった。つまり特に統計的証拠から推測でき、または推測できないものであるかもしれない。このことは経済学に関する哲学的興味の継続であった。これは経済学の限界に触れており、いまだに大きく展開されておらず、その演繹的アプローチと帰納的アプローチとの交点にあった。

ケインズの貨幣に関する興味はケンブリッジ経済学の学士優等試験(Cambridge Economics Tripos)の要求に適しており、マーシャルの退任およびフォックスウェル(Foxwell)⁽¹⁵⁾の就任撤回に従っている。経済学はまだ小さな学士優等試験であった。

6. ケンブリッジ経済学者の皮肉⁽¹⁶⁾

ピグーとケインズは主要な理論家であり、マーシャルおよびフォックスウェルの実際の後継者であった。ケインズはマーシャルと異なり経済学を倫理学の補助物とみなしてはいなかった。彼の倫理的信頼は表現されるものを通じての活動ではなかった。実際にケインズの社会哲学はその時代の進歩的な考えによって測定した場合、すでにいくらか古めかしかった。全体として社会の経済進歩に対すると同様に、彼はマーシャルとともに法律および制度の現存組織のなかで操作される市場力を安全にさせるであろうと考えていた。その主要な要請は自由貿易の維持であった。第一次世界大戦以前にケインズはインド関係を除いて通貨改革者ではなかった。つまり経済理論あるいは実際において主要な革新は必要でないという見解に等しかった。

ピグーはマーシャルの道徳的権威を継承した。ハロピアンバイキング(Harroviaan Viking) および陸軍将校の息子として背が高くハンサムで、

ピグー自身あたかも閲兵中であるかのように振舞っていた。彼の心のなかの道徳は物質的な努力に抜け切れず繋っていた。彼にとっての経済学は道徳的企業であった。2人の間の哲学的差異はピグーの最初の名著1912年の富および福祉 (Wealth and Welfare) の意見によって手際よく焦点が合わされている。福祉は財と同じ事柄を意味している。彼自身の福祉の倫理学的概念にもとづいて、ピグーは自認した問題が福祉を助長するために容易な実際の尺度を作ることであるという厚生経済学の問題を創作した。一方ケインズは経済学が人的福祉に対する多くの実践的貢献をなした倫理学から押し進められなかった。他方ピグーは経済学的知識の進歩が幾分か経済的イベントに影響するという希望は頼りにならないものであるという悲観的結論を導いた。

同僚としてケインズとピグーは異なっていた。ピグーは行政経験はなく、30歳で教授に任命され、多くの才能を展開していた。多作の著者であるけれども課題についての彼の習得方法は、それを本に書くことであった。1914年以前のケンブリッジにおいて、学部における知的リーダーシップを与えられたのはケインズよりもむしろピグーであった。ケインズは高いランクではなかったが、彼の主たる知的興味は可能性 (Probability) に関する研究であったし、長い休暇は大学特別研究員の論題を本にするのに多くが占められていた。

1909年1月にケインズは莫大な聴衆の前で貨幣、信用および物価 (Money, Credit and Prices) について週2回の講演を行なったのが最初であった。彼の戦前の講演負担は全く過酷であり、3年で100時間に達しており、平均週4時間が3期間にわたっている。彼の人生のこの時期はすばらしい講師であった。通貨 (Currency)、金融 (Finance)、およびインドにおける物価水準 (the Level of Prices in India) に関する彼の特別講義は、1911年の冬学期におけるケンブリッジおよびロンドン スクールでの講義であった。彼の報酬は彼の講義の出席者に満足させるような形であった。1910年1月の株式取引所での講演には52人で立見席はなかった。その年の12月までに

彼はすでに£220を貯蓄していた。

メイナードは1909年12月に経済学男子学生のために政治経済クラブを開始し、それはケンブリッジ経済学学部 (Cambridge Economics Faculty) の最も有名な制度になった。彼はケンブリッジの伝統のために正しく好ましい教育法制度としてそのクラブを必然的に変えた。彼自身の創造はキングスおよびトリニティの専属の議論団体をモデルにした。それは月曜日の夕刻に彼の部屋で開催され、会員は招待によっていた。各週論文でなされ、居合わせた人すべてに関してコメントし、それはくじによって決定された順番であった。ケインズはその議論を要約していた。彼は精力的な知識活動が密接な環境のなかで行われた時が最善であった。また彼は極端に周囲の状況に敏感であった。

彼は常に生徒に親切であり、彼らの形づくられていない思考を挫くことよりもむしろ引き出した。他方地位の高い訪問者はラフに扱われていた。この時期の彼の生徒の多くは個人的な友になった。大学生および協力者として若干の者はケインズ革命 (Keynesian Revolution) を形づくる主要な部分を演じた。

ケインズは1926年にショープ (Shove) で大学特別研究員奨学金を得ることに成功した。彼はインド人の学生を得るために、インド省による関係を利用した。また彼はケンブリッジ リポーター (Cambridge Reporter) の民族主義者の中傷に対して彼らを守った。

7. 貨幣数量説⁽¹⁷⁾について

ケインズ革命の歴史は大部分貨幣数量説の物語である。それは第一次世界大戦以前からであり、ケンブリッジにおいて彼は数量説を拡大していった。貨幣数量説⁽¹⁸⁾は物価が貨幣量に比例して変化すると述べている。つまり物価を決定するのは貨幣量であるということである。貨幣供給が大きければ大きいほどその価値は低下する。それは物価がより高くなるといっているのと同じ事柄であり、逆もまた同じである。貨幣量と貨幣価値との間に、

このような因果関係の結び付きに対する理由は貨幣自体の特性にあるといっている。

貨幣に対して古典派経済学者は主として金 (gold) を意味していたし、価値をもっている商品であり、他の商品のそれと同じようにその供給および需要に依存している。しかし貨幣は単一の使用を持っており、他の商品間の交換に影響するはずである。貨幣に対する需要は何を買うかに対する需要のみである。言い換えれば貨幣に対する需要スケジュールは購買に利用できる財の供給ばかりである。この供給はある特定の時間に与えられるから、貨幣の需要はあまりに安定していると取られている。貨幣量は貨幣需要が一定あるいは固定であると仮定すれば、物価はその供給に比例して変化するということである。

これらの仮定を除外すれば、貨幣量の変化は財およびサービスの需要かくして生活および雇用に影響を及ぼすという可能性である。貨幣は取引が行われる物価水準のみを決定し、行動自体の水準ではなく、実質的生産力によって独立して固定される。問題は住民の生活を保つために十分な生産を得ることである。このことは生産および分配の効率を増加することによってのみなされる。自然からより多くを努力して得るために、人間の絶え間ない闘争は貨幣部分が貧困からの解放をスピードアップすることであった。

しかしながら古典派経済学者は貨幣価値の変化が報酬の分配に影響を及ぼすと認識していた。物価の変化はあるグループから別のグループへの所得移転の結果であり、このような移転は望ましくないと考えられていた。物価は不公平であり、それは貯蓄者から富を移転させる傾向がある。貯蓄の価値は衰退し、借入者にとってその債務負担は軽減する。物価下落は不況の原因になる傾向があり、労働価格は財価格よりもっと面倒であり、企業家に損失を引き起こす。それ故に19世紀の金融政策の主たる目的は物価の長期安定を維持することであった。このことは固定した為替相場で金 (gold) に交換できる国内通貨を保つことによってもっともよく達成され

た。世界の金価格からの逸脱による国内物価水準に対するある傾向は、金（gold）の輸出あるいは輸入を経て国内通貨の収縮あるいは拡大を相殺し、価格逸脱に動かされた。19世紀における国際金本位制に対する変動は、過剰発行紙幣から先見の明のない政府を妨げるための中産階級の決定、およびこのような先見の明のなさの目覚めによって企業崩壊による企業家の恐怖に反映した。

ケインズはマーシャルの貨幣論⁽¹⁹⁾を継承した。金融論に対するマーシャルの偉大な貢献は、マーシャル自身が苦心して仕上げた現金残高理論であり、貨幣需要が短期においては安定するということである。マーシャル個人によって現金の形で資産のある一定部分を保有あるいは即座の購買を助長するために、保有する一国の通貨は現金残高からなっている。個人が専らの現金を2倍するならば、財購入あるいは投資による超過額に支出する。この支出増加は物価が2倍になる原因になり、それ故に望ましい水準に現金残高価値を回復する。逆に現金量が半分であるならば逆のことが生じる。これらのケースにおいて現金残高需要は物価水準の調整によって新しく貨幣供給量をもたらす。

利子あるいは所得に対する現金保有は投資購入によって獲得され、利子率の低下は決して借入増加をもたらすものではない。それを保有するコストを減少することによって現金保有の需要は増加するであろう。後にケインズが貨幣保有の投機的動機⁽²⁰⁾と呼んだ根源はこのマーシャル的公式（Marshallian formula）のなかでみられる。受け取った所得すべてはただちに支出されない可能性があり、企業活動の変動を説明するのに金融論を利用している。数量説は雇用および生産水準が実質的非金融項目で説明される。それは結果的にいくらかの欲望および短期の失業および生産の問題に関する分析手段と同様に無関係である。ケインズは確かにマーシャルの骨子に肉付けをし、マーシャル自身との多くの会話に助けられている。1923年までケインズは貨幣に関する純理論を何一つ出版していない。彼は金融改革論（Tract on Monetary Reform）の第3章に簡単な形で書いている。

ケインズが扱ったトピックスは便宜的に4題に分けられる。(a)貨幣価値を決定する要因、(b)貨幣量の変化が物価に影響するメカニズム、(c)価格変動の社会的および商業的影響、(d)数量説の統計的説明の問題である。

ケインズは貨幣供給と貨幣需要の決定要因を分析し、数量説は貨幣需要が一定としてとられている場合のみ正しいと主張している。個人が所得獲得に対して、保有貨幣のマージンにおける利益と釣り合いをとる方法について、マーシャルの議論とケインズの講義プリントの抜粋には関係がなかった。しかしこれは後に利子率に関する流動性選好理論⁽²¹⁾の公式化に、ケインズに影響を与えた議論であり、彼は期待の役割、つまり貨幣は直接の交換目的のみならず、価値保蔵および将来交換として使用されるという事実は、その現在価値が現在量のみならず、その将来の量および需要に関連をもっているという信頼に依存していると強調している。

ケインズは貨幣供給に対する附加が物価上昇を生じるというマーシャルのメカニズムの説明をしている。イングランド銀行 (Bank of England) の金庫室にある新しい金は公定歩合を下落させる傾向がある。このことは投機家および企業家に購買を増加させることができる。この刺激は漸次すべての商品部分を通じて拡大する。やがて新しい金 (new gold) が以前よりも大きくはない実質取引量を金融するに必要である。新貨幣 (new money) がある商品の需要を増加することによって始まるということは注意せねばならない。しかし企業家あるいはデイラーあるいは仲買人の側のみである。消費者は多くを支払わねばならないし、それ故に他のもののある消費部分と交換せねばならない。もちろん商品に対する貨幣価値は恒久的に増加し、信用額に対する貨幣価値も顕著である。それ故にわれわれが貨幣でわれわれの富 (wealth) を測るならば、総体的富 (aggregate wealth) は以前よりも大きくなると思われる。

ケインズはより興味ある説明をしている。新しい金 (new gold) はその量がただちに正当化されるだろうという完全な大きさに公定歩合を必ずしも低下しない。それは潤沢な収益あるいはある他のものまでの時間に値を

付ける。景気変動に影響を及ぼす神秘的な代表者 (mysterious agent) は商品および企業の拡大を企だてる。それ故に新しい金 (new gold) はたとえそれが直接の影響を及ぼさないまで、また他の原因が取引拡大を始めるまで待つであろうとも、それらの原因を援助し取引競争者を加速させ、旧ブームと新しいものとの期間を縮め、結局金 (gold) 生産の増加のない場合であるよりも公定歩合を低下させるのに役立つ。

ケインズは4項目に価格変動の結果をまとめた。(1) 利子率および予期された利潤に関する効果、(2) 富の分配に関する効果、(3) 景気変動の効果、(4) 政策効果である。彼は物価下落が社会のおよび商業的理由で、物価上昇よりもいくらかよいと結論づけた。物価下落は企業家および債務者を犠牲にして賃金稼得者および債務者に利益を与える。このことは富の分配をより均等にし、それ故に合法的である。債権保有者のより意外な関心は借手が富み、貸手が比較的貧しいという意見によって説明されている。けれども彼は物価下落が企業にとって不快であるだろうということをも認めた。

物価下落よりも物価上昇を選好するに十分な基礎はなく、一部において企業家が物価上昇期を通じて通常でない利潤を得、一部においてわれわれは貨幣価値の成長によって企業進歩を測定する常習的な習性をもっている。貨幣が恒久的に安全な比較尺度であり、一方商品が変化するという先入観をわれわれは全く解明することはできないといっている。

彼の人生のなかでケインズは数学的基礎の経済学を制定する企図のために人を動かす目的で進めることであり、それらのほとんどはすでに可能性 (Probability) に関する研究のなかで述べていた。彼は可能性理論および経済学双方を数学ではなく論理学の分野であるとみなしていた。サー ロイ ハロッド (Sir Roy Harrod) はケインズが数学に対する特別な天性をもっていなかったと指摘している。彼は専門的な数学の真髄に対する喜び、それらの難解な領域を探し出すのではなかった。ケインズが探究した真実は人間行動に関係していたのである。

8. 自由貿易に関する見解⁽²²⁾

ケインズは保護に対する雇用議論を論破することに集中した。保護主義者について次のように言っている。「これらの財が入ってくる。われわれがそれらを締め出すならば、あるものはそれらを作らねばならない。それらが外国と同様に安くこの国で作ることができるならば、それらは現に作られるであろう。関税の後にその価格が上昇する場合、それらはここで作られるであろう。それ故にそれらを買入れる人はある他の方向に彼らの購買を制限せねばならない。それ故にそこで雇用を減少する。過剰労働で獲得される財貨量は減少し、平均して労働の生産性逓減によって失業を恒常的に救済することを望むことはできない。そして労働階級の満足水準はぐるっと一回りして低下するであろう。」

関税改革のケースは相対的に稀少なものを作ることの原則が残っている。それらのものを作ることに関係している人に対してこのことは疑いなく利益である。しかしそれは等しく他のことよりも多くの苦悩の原因である。全体としてその社会はその国が欲しているものを恣意的に稀少なものを作ることによって利得を希望することはできない。

ケインズは保護が雇用を増加しないと結論した。彼は一般的な過剰生産の不可能性を強調した。失業は一種類またはある別のものの誤算の結果としてのみ生じる。関税の第一の影響は誤算を増大するはずである。

1903年に始まった関税改革キャンペーンにおいて、ジョセフ チェンバリンは特に失業救済として保護を提出した。疑いなく彼の議論の多くは悪いものであった。特に彼は外国貿易と雇用との関係を十分に扱うことを欠いていた。1900年と1914年との間にブリティッシュ輸出は回復した。自由貿易はブリティッシュの繁栄を支持するに十分と思われた。

ケインズは1914年以前金融および貿易理論に貢献しなかった。彼は本能的に独創的な経済学者ではなかった。強い知的あるいは倫理的刺激なしに独創的経済思考に対するケインズの能力は、ある実務的問題によって呼び

起こされなければならなかった。彼の正統思想の擁護は精神的怠惰あるいは専門的な水準による狭い関心ではなく、彼が世界改革論と呼んだものの一部分であった。自由貿易および資本移動のように、数量説は知的な進歩の準備の部分であった。進歩の敵であった正統思想のチャレンジャーであり擁護者ではなかった。経済学者はその監視人であった。この問題の見解が完全雇用の仮定に依存するということはケインズ革命以来流行になった。

1914年以前ケインズは政策の革新者ではなかった。進歩は自由党によって現存原理の着実な適応を要求した。1914年以前ケインズの時折の政策介入はほとんど自由貿易に関する攻撃による助言であった。彼は保護の誤った考えがすでにさらされていたある人と同様に、自由党の友人による政治的要求のなかにあった。ケインズの価値および優先権が与えられ、1914年以前に経済学の多くの知的な努力に投資することは彼にとって小さな意味であった。しかし1914年以前の彼の限界はのちに力の源泉になったはずである。

9. ケインズの個人的生活⁽²³⁾ — おわりにあたり —

ケンブリッジへ復帰した年にメイナードの生活テンポは加速した。インド省におけるいくぶん暇な下級事務員は一生懸命働くケンブリッジ経済学研究員 (Cambridge economics don)、ジャーナリスト、編集者および著者になった。インド金融組織に関する最初の本は1913年に発行された。イングランドにおける4連続長期休暇にわたって、1909年から1912年まで彼は本にすべき可能性 (Probability) に関する論題を主題とするものを研究した。可能性 (Probability) もまたピレニー、ギリシヤ、シシリにと彼に随半した。彼は指数についてベルセイルでし、インド通貨をエジプトでした。彼は知的な研究を実務の仕事に深くかかわることと結び付けた。彼は彼自身カレッジの金融に関する管理に興味をもっていた。彼の文官のキャリアーは1913年インド通貨および金融に関する調査委員会の任用に始まった。彼の道楽もまた花開いた。ゴルフは隠退したが本収集を増し続けた。

1911年に彼は最初の主要な美術の著作を買い入れた。彼はモンテ カルロ (Monte Carlo) でギャンブルをした。1913年から株式取引所でのギャンブルをした。

自由党イングランド (Liberal England) が瀕死であった時、彼と彼の友人は意外に気がついていなかった。フェビアン主義者 (Fabians) がケンブリッジに達し、婦人参政権論者が進展し、1909年のロイド ジョージ (Lloyd George) の予算およびそれに対する英国国会上院の反応は、制度危機を誘発し、階級闘争は激烈になり、アイルランドは騒動のなかにあり、一つの国際的危機は別のものを伴った。メイナードはそれらの事に気づいていた。第一次世界大戦後のヨーロッパについて彼が書いた事項は種々なる予測に反響した。つまり旅行の自由、為替の自由、通貨安定、進歩の感覚、秩序ある人生条件であった。

ケインズが30才近くになった時、彼の天性の実務的行政的世俗的な側面は実行に移され始めた。彼はより多くの研究、より多くの娯楽を求め、むだな時間を満たすことができた。この転換の始まりはケンブリッジのなかで見ることができる。メイナードの大学特別研究員は彼がカレッジの経済学講師 (College Lecturer in Economics) に任命された時であった。彼はカレッジの会計にわたって批判的な目を走らせ始め、金融行政の検査官に任命されていた。1911年彼は資産委員を受け入れ、その地位から会計系の保守的な行政に対するキャンペーンを計画した。彼は1912年5月11日のカレッジの年次集会で会計系の政策を打ち破るのに成功している。成功の謀反者として彼は会計課委員に選出された。会計課への彼の登庁は初めから解っていた結論であった。1912年に彼は大学特別研究員選者 (Fellowship Elector) になった。そのことは彼が毎年一体全体どんな課題に関してそれぞればく大な論題を読まねばならないかを意味していた。

ケインズの娯楽はケンブリッジの生活の厳しい局面のなかで、特に友情の探索に決して置き換えなかった。彼が1910年11月にアポストル (Apostles) から飛び立つとしても、その社会ではほとんど8年間に20論文を読んだ。一

方前半の検分はたとえ漸次わずかな情熱的感動的な満足であったとしても、新しいものを供給し続けていた。1911年まで彼の最も親密なケンブリッジの友はジェラルド ショーブ(Gerald Shove)⁽²⁴⁾であった。彼はサイレント ショーブ (silent Shove) と呼ばれたように暗いムードに対する人間的課題をもっていたが、メイナードが魅力を感じ、熱情的で刺すような鋭さ、冒瀆的大胆不敵な側面をもっていた。ともにスポーツ イベントにおける大学の競技者を視察に行っていた。1912年3月ショーブとメイナードはモンテカルロで食事およびギャンブルの休日を過した。3年間のうちメイナードの最初のイースターの休日であった。

メイナードのロマンチックな興味はどこかに置かれていた。その夏に彼はエマニエル カレッジ (Emmanuel College) のゴードン ハミングトン ルース (Gordon Hannington Luce) に強くほれこんでいた。彼は1912年1月にアポストルになっていた。ルースは貧乏な教区教師の13番目の息子であり、金髪で色白のずんぐりとしていたが、詩の熱望をもっていた。個人的手段なしに詩を熱望することのためにはイングランドにいくらか展望があった。

メイナードはビエナ (Vienna) を経て帰る前に、トルストイのロシア (Tolstoy's Russia) を現出させた中世風の豪華な祖先伝来の家庭キス エニ ルン (Kiss ennye Rum) で9月の2週間を過した。それらは単調な型で仰天させるようなブルューゲル (Breughels) の多くの新しい建物は大きく彼に印象づけられた。メイナードの学生のうちの2人は経済学者ではなく、親しい個人的友であった。その1人はシドニー ルツセル クーク (Sydney Russell-Cooke) で後に株式仲介人になり、もう1人はアーチバルド ローズ (Archibald Rose) ですでに専門医であった。メイナードは1913~14年の数ヶ月間続けてクークと仕事をした。彼らは株式取引所でともにささやかにギャンブルをした。ローズは彼の背後に中国の領事役人がいた。彼は非常に小さく気難しい男でこっけいなマナーをもっており、マンドリンを学び立派なアマチュア ジョッキでもあった。メイナードは

彼に経済学を紹介し、彼はメイナードに乗馬を紹介した。彼とローズはメイナードがケンブリッジにいた時、1912年のほとんどの土曜日の午後乗馬にいった。1912年4月彼らはウILTシユア(Wiltshire)およびニュー フオレスト(New Forest)でともに乗馬休暇をとった。1913年イーストに帰ったローズは彼の性質の積極的な側面を理解し、それに同情したメイナードの新しい数人の友のうちの1人であった。

1912年6月と8月にメイナード自身マールボロウ近くのエバライフのクラウン イン(Crown Inn)を借り、彼の友は交替にやってきた。このことは別の新興教徒の機会であり、オリバー(Olivier)の3姉妹が姿を現した。オリバーの最も美しい少女ブリンヒルド(Brynhild)はメイナードにとって魅力であった。彼は彼女と乗馬する時が幸せであったが、彼女は彼に気が進まなかった。まもなくキングサム(A.E. ポップハム(Kingsman, A. E. Popham)と結婚した。

メイナードと家族との関係もまた戦争前の年に変化していった。彼は父に依存するようになり母以上であった。1910年10月に58歳でネビルは大学の学籍簿係になり、彼はその地位を15年間典型的な奇才なさおよびよきセンスで占めていた。6ヵ月後彼はオールド カレッジ ペンブローク(Old College Penbroke)の名誉フェロー職になった。彼の労働時間は1910年の2000から1913年1500に減った。対照的にフローレンスのエネルギーは拡大し続けた。1911年に彼女はケンブリッジ タウンの州会議員に選ばれた。彼女は婦人の国家評議会委員に加わった。彼女は協議会に随行して全イングランドを旅した。ケンブリッジにおいて彼女は常連であった。彼女は衛生上の取決めに関する公衆衛生委員を鼓舞し、少年少女の失業に関して世論をかきたてた。ネビルが個人的道楽の世界つまり蝶々の収集、切手収集、ゴルフ、ブリッジなどで、家族的仕事の積極的管理から撤退した時、フローレンスは家族の頼みの綱としての立場であった。

メイナードの弟ジェオフリィ(Geoffrey)はメイナードの2重性格つまり科学者のそれとなかなくずく美術に価値を認めていたことである。ジェオ

フリイは外科医としてのキャリアの第一段階セント・バートフォロムズ病院 (St. Bartholomev's Hospital) における学士試験で最初の賞をとりメイナードは非常に喜んでいる。ジェオフリイは兄弟の冷淡また両親のメイナードに対する明白な選好によってひどく傷ついていた。ネビルはメイナードの金融判断に非常な信頼を示し、フローレンスの稼得資金管理を彼に転換した。しかしてジェオフリイは彼自身に挫折感をもった。

メイナードは妹マーガレット (Margaret) に非常に接近していった。彼女の結婚前の人生の愛はエグランティン・ジェブ (Eglantyne Jebb) であり、ドロシイ (Dorothy) のニューンハム (Newnham) に住んでいた。メイナードとマーガレットとの親密さは深まっていったが、1913年6月に合同委員会の仕事を含む短い求愛期間の後に、Dr. ジョン・ブラウン (Dr. John Brown) によってA.V. ヒル (A. V. Hill) と結婚した。A.V. ヒルはケンブリッジ・トリニティ・カレッジの研究者および年少の学生監 (Fellow and Junior Dean) である生理学者であった。1914年6月に彼らの娘はメアリイ・エグランティン (Mary Eglantyne) と命名された。ヒルはひどく禁欲的であり、彼女と似合っていた。

1911年秋からメイナードはエコノミックジャーナル (Economic Journal) の編集を始めた時、学校のある期間の各週の間を首都で過した。それは1937年まで続いたパターンであった。新しい規則正しい彼の訪問はブルームスバリーの生活準備の改善に対する一般的要請と一致した。ケンブリッジおよびロンドンで逢った経済学夕食クラブ (economics dining club) のメンバーを通じて、政治経済クラブ (Political Economy Club) と同様に、メイナードは経済学者の F. W. ハースト (F. W. Hirst) の編集者で金融ジャーナリスト、のちに彼に役立った銀行家および実業家に近づき始めた。1914年メイナードはネビルの誕生日祝い金 (birthday money) のように彼自身の貯蓄収益でもって株式市場に投資を始めた。1914年彼はまたバークレイ銀行からの£1,000当座貸越し資金の援助とロジャーフライ (Roger Fry) からの£1,000ローンの収益で投機を始めた。

彼はインド省を退職してから繊細な部分を演じた。それはインドの発展しつつある金融組織に関して一般市民の擁護者および個人的批判者として活動した。彼は1911年の冬学期 (Lent Term) においてロンドン経済学スクール (London School of Economics) で通貨、金融およびインドにおける物価水準 (Currency, Finance and the Level of Prices in India) について6回講義した。これらの講義はロイヤル エコノミック ソサイアティ (Royal Economic Society) で読んだ最近のインド通貨発展の問題 (Recent Developments of the India Currency Question) を基に形成していた。メイナードはインドの通貨協定の世界史的意味をすでに握んでいた。1912年彼はインド金融事件 (The Monetary Affairs of India) に関する本を書くことをマクミラン (Macmillan)⁽²⁵⁾ と契約した。同時に可能性 (Probability) の本もまたマクミランによって出版されることが決定された。新しい出版関係の大きな魅力は彼が古いイートンの友、ダニエル マクミラン (Daniel Macmillan) で取扱ってくれることであつた。インド通貨および金融 (Indian Currency and Finance) は1913年6月9日に出版された。その他平和に関する経済的影響 (The Economic Consequences of the Peace), 条約改訂 (A Revision of the Treaty), 金融改革論 (A Tract on Monetary Reform) と続き、これらは歴史的政策的構成を設定し、中心的技術的議論を示し政策に対する構造的示唆で締めくくった。

1915年6月ケインズはロイド ジョージの特別アシスタント サー ジョージ ペイシュ (Sir George Paish) の助手として英国政府の仕事についた。1913年に調査委員会 (Royal Commission) に任命したのも戦争中大蔵省に呼んだのも彼であつた。最初の内部同盟会議のためにパリに行かせたのも彼であつた。またその委員会は食料価格の上昇を調査することでもあつた。彼は内閣の小麦委員会 (Wheat Committee) の秘書として世界市場価格でインド麦の政府購買計画に活動した。その同盟会は同盟国の戦争債権の全体的複合組織の企画であつた。第一次世界大戦中またその後の活躍振りには多々あるけれども紙数の関係で割愛する。この活動が第二次世界

大戦委員会へとつながったのである。最後に彼は1925年に世界的に有名な経済学者が世界的に有名なバレリーナーと結婚した。非常に燃え上がっての結婚であったらしい。

1941年イングランド銀行の理事に就任し、また第二次世界大戦終末前に戦後の通貨貿易に関するケインズ案を1943年4月に発表している。1944年7月にはIBRD、通称世界銀行の委員会委員長になっている。1945年8月には借款交渉のために渡米し、同年12月には英米金融協定を締結している。翌1946年4月21日、心臓麻痺のため私邸で急逝している。

注

- (1) Alfred Marshall(1842~1924年)は経済学者であり、Marchant Taylor's School および Cambridge の St John's College で教育を受け、第2回大学での数学に関する学位試験の一級合格者となり、St John's の fellow になる、1977~81年 Bristoll University College の学長になり、その後の2年間 Oxford Balliol College および Cambridge における経済学教授、Henry Fawcett を後任にし1907年退任、Victorian の総合学者の一人、1890年、経済学原理を出版、Jevons に対する古典的伝統、観念的な歴史理論、倫理学を調和させた。
- (2) John Neville Keynes (1852~1949年) は J. M. Keynes の父で論理家および大学管理者である。Salisbury の John Keynes (1805~1878年) と Anna Maynard Keynes (1821~1907年) の息子であり、彼は Fanny Maria Purchase, née Keynes (1836~1933年) の half-sister であった。London University College の Amersham Hall および Cambridge Pembroke College の卒業。1875年 Senior の道徳主義者、1876~82年 Pembroke College の fellow, 1911年 Hon. Fellow。1884~1911年大学で道徳科学を講義、1882~92年地方試験、講義の Syndicate の assistant 秘書、1892~1910年秘書、1910~25年 Cambridge 大学の学籍簿係、1884年形式論理学の研究と実践および1891年政治経済の展望と方法の著者。
- (3) Florence Ada Keynes (1861~1958年) は J.M. Keynes の母で Rev. John と Ada Haydon Brown の長女、個人的に Newnham College の卒業、1882年 J. N. Keynes と結婚、1894~1928年 Cambridge の charity 機構社会局の秘書、1907年 Cambridge の Guardian 局の議長、1912年国連の婦人労働者の創立者、議長、1914年 Cambridge 自治都市会議の最初の婦人委員、1931年市助役、1932~3年市長、1917年 Papworth Village 定住創設、1930年国家婦人会議の代表、Cambridge の少年雇用交換を start した。1954年 Newnham College の Hon. Fellow。Cambridge における最も忙し

い婦人。

- (4) Robert Skidelsky : John Maynard Keynes, 1983, Macmillan, p.p.1~71を参照。
- (5) Henry Fawcett (1833~1884年)は経済学者および政治家。London King's College School および Cambridge Peter House で教育を受ける, 1863~84年 Cambridge における政治経済学の教授, Ricardo および John Stuart Mill の教義についての伝統的な解説者である。
- (6) Dr John Brown (1830~1922年)は Florence Ada Keynes の父であり, J. M. Keynes の祖父にあたる。1855~64年 Manchester の chaethan Hill Road の Park Chapel の聖職者, 1864~1903年 Bedford Bunyan Meeting の聖職者, 1891年組合教会団体の議長, 1859年 Ada Hydon Ford と結婚し, 3人の息子と3人の娘を持つ。J.M.K の母を別にして1864~1958年 Alige は Doctor, 1949年 Jessie は Albert Lloyd と結婚, 1870~1946年 Walter Langdon Brown は高名な内科医, 1873~1957年 Harold および1879~1958年 Kenneth は事務弁護士であった。
- (7) Henry Sidgwick (1838~1900年)は哲学者および大学改革者。Cambridge Rugby and Trinity College の卒業, 失なった教義の教理神学的責任を避けるため, 1869年 Trinity の Fellowship を辞任, 1882~1900年 Knightsbridge の道徳哲学の教授, 指導的な後期 Victory 的敬虔な懐疑論者であった。
- (8) Robert Shidelsky : John Mynard Keynes, 1983, Macmillan, p.p.73~165を参照。
- (9) Bernard Winthrop Swithinbank (1884~1958年)は行政官, 1903年 Eton および Oxford Balliol College 卒業, 1946年に退任する前に Burma における生抜きの文官となる。Eton における J.M.Keynes の最ともよい友達であった。
- (10) Sir (Joseph) Austen Chamberlain (1863~1937年)は自由労働組合員の政治家, 1882年 Rugby および Cambridge Trinity College 卒業。政治家産出における Oscar Browning の唯一の成功である。1913~14年 Indian 金融および通貨に関する Royal 委員会の議長, J. M. Keynes が最初に彼を知り得た時, そして彼の知性は首相職に適しているかも知れないといっている。1919~21年大蔵大臣, 1924~29年外務大臣を務める。
- (11) William Stanley Jevons (1835~1882年)は経済学者および論理家, 1851年 London University College 卒業, 1876年 London University College の政治経済の教授, 限界効用理論および取引不況に関する太陽の黒点理論で有名。J. M. Keynes は彼のびっくりさせられるような書出し style を見出した。
- (12) Robert Skidelsky : John Maynard Keynes, 1983, Macmillan, p.p.166~187を参照。
- (13) Arthur Cecil Pigou (1877~1959年)は経済学者, 1896年 Cambridge Harrow および King's College 卒業, 1899年第一部の歴史および1900年第二部の道徳科学,

1902年 King's fellow, 1908～48年 Cambridge University の政治経済の professor として Marshall の後任となる。Marshall と同様に倫理学の適応の支流として経済学を見ていた。厚生経済学の British School の創立者。

- (14) Robert Skidelsky : John Maynard Keynes, 1983, Macmillan, p.p.206～209を参照。
- (15) Herbert Somerton Foxwell (1849～1936年) は経済学者および書誌学者, Taunton Wesleyan College Institute, London University College 卒業。1868年 Cambridge St John's College, 1870年 Senior Moralists, 1874年 Fellow of St John's, 1881～1928年 London University の政治経済学教授, 1927～30年 Royal Economic Society の President。Foxwell は約60,000書, pamphlets および経済学に関する MSS を収集。それは London Goldsmith's Library および Harvard University に売却。
- (16) Robert Skidelsky : John Maynard Keynes, 1983, Macmillan, p.p.209～214を参照。
- (17) Robert Skidelsky : John Maynard Keynes, 1983, Macmillan, p.p.214～223を参照。
- (18) 貨幣数量説は Irving Fisher の交換方程式が代表的なものである。いま M を貨幣の流通量, V を流通速度, P を物価指数, T を一定期間における総取引量, 言い換えれば所得とすれば, $MV=PT$ で示される。いま V を一定とし, 変形すれば $P=\frac{MV}{T}$ となる。 V および T が不変である限り貨幣流通量 M と物価水準 P は同じ割合で変化することを示している。総取引量 T は生産物市場において決定されるから, 貨幣量が与えられれば物価 P が決定されるということを示唆している。そこで金本位制のもとにおいては国際収支の変動に対応して gold の流入および流出によって国民経済に変化をもたらすのである。いまある国の国際収支が赤字になったと仮定すれば, すなわち支払超過を生じた場合にはその国の gold が流出するとともに国内通貨 M の減少をもたらす, deflation になる。deflation になれば失業が発生し国民所得が低下することになり物価 P が下落する。そのことは外国との総体的価格の通減であるから輸入よりも輸出に対して有利に働く。つまり交易条件の改善である。従って輸出増加によってその国の国際収支は黒字に転換し, gold の流入を生じる。それによってその国の通貨量が増大し景気は回復する。景気回復は物価上昇となり交易条件は低下し国際収支は赤字へと転落する。つまりこのことを金本位制における game rule と称されている。古典派貨幣数量説を理解する一助になるであろう。
- (19) 貨幣量と物価との関係は Cambridge の金融方程式と呼ばれている。いま M を貨幣量, PY を現行物価における国民所得, k を現金を保有している部分とすれば, $M=kPY$ で示される。もし k が一定であるならば M は PY に比例して変化する。 k は人々が現金を保有しようとする所得割合であり, 一般に Marshall の k

と呼ばれている。つまり k は Irving Fisher の流通速度の逆数で $k = \frac{1}{V}$ である。

- (20) 貨幣需要とは経済主体が貨幣を保有しようとするためであり、Keynes は流動性選好のなかで貨幣需要に対する動機を次の3つに区分している。
- (1) 取引動機とは個人および企業が交換において現在の取引に対する現金の要求、すなわち交換手段として貨幣を需要することである。この動機をさらに所得動機と営業動機とに分類、所得動機とはわれわれが現金を保有しようとするのはわれわれの収入と支出の間隔を橋渡しすることであり、営業動機とは現金は営業費用発生の時間と売上高収入の時間との間隔を橋渡しするものである。
- (2) 予備的動機とは突然の支出に要する臨時費、利益あるいは購入の予期されない機会に備えることであり、支払手段あるいは蓄積手段として貨幣を需要するのである。
- (3) 投機的動機とは将来何が生ずるかを市場よりも最もよく知り得ることによって、保証される目的のために貨幣を需要することである。
- (21) Keynes は取引動機、予備的動機、投機的動機に区分し、利子率はこのような動機に基づく貨幣需要量と通貨当局による政策目標に応じて通貨量を官更し、それを通じて決定される貨幣供給量との均衡水準で定まると述べている。取引動機および予備的動機は所得水準に依存、すなわち $L=L(Y)$ で表わされる。ここで L は貨幣需要量であり Y は所得である。投機的動機は所得に依存するのではなく利子率 i の増減に依存するから、 $L=L(i)$ で示される。貨幣供給量を M とすれば $M=L(Y, i)$ となる。これは貨幣の需給均衡条件式である。
- (22) Robert Skidelsky : John Maynard Keynes, 1983, Macmillan, p.p.227~229を参照。
- (23) Robert Skidelsky : John Maynard Keynes, 1983, Macmillan, p.p.233~402を参照。
- (24) Gerald Frank Shove (1887~1947年) は経済学者、1907年 Uppingham および Cambridge King's College 卒業、古典から経済学に転じた。1909年 Apostle、一般的に静かで無口で、しかし元気旺盛のひらめきをもち、また道徳的熱愛をもっていった。1915年彼は正当な歴史家および Virginia Woolf のいとこで Sir Frederic Maitland の娘 Fredegond Cecily Maitland と結婚、1926年 Fellow of King's、戦争の間 Cambridge の最とも懸命に働いた economics don であった。ほとんど何も出版しなかった。
- (25) Daniel of Mendi Macmillan (1886~1955年) は出版業者、1904年 Eton および Oxford Balliol College 卒業。1911年 Macmillan & Co.の取締役、J. M. Keynes の Eton の友および後の出版者。

参 考 文 献

- Alain Barrère ; ed. The Foundations of Keynesian Analysis, 1988, Macmillan.
- Alain Barrère ; ed. Money, Credit and Prices in Keynesian Perspective, 1989, Macmillan.
- Alfred Marshall : Principles of Economics, 8ed. 1961, Macmillan.
- John Maynard Keynes : The General Theory of Employment Interest and Money : rep, 1954, Macmillan.
- John Maynard Keynes : A Treatise on Money : rep, 1971, Macmillan.
- Mabel F. Timlin : Keynesian Economics, rep, 1948, University of Toronto.
- Robert Skidelsky : John Maynard Keynes, 1983, Macmillan.
- 森井昭顕 : Inflation の予想と金融的拡張, 1975, 広島経済大学研究論集, 第11号。
- 森井昭顕 : 開放体系におけるマクロ経済モデル分析, 1977, 広島経済大学研究論集, 第15号
- 森井昭顕 : 国際収支調整に関する政策的評価, 1985, 広島経済大学研究双書。
- 森井昭顕 : 国際マクロ経済理論, 1988, 千倉書房。
- 森井昭顕 : 経済政策の諸効果, 1993, 広島経済大学経済研究論集, 第16巻第 2 号。